沢（新庄）・岩城（亀田）・松平（上の山）・酒井（松山）・六郷（本庄）・水野（山形）・織田（天童）・津軽（黒石）・米津（長瀞）・生駒（矢島）と、日本海側の奥羽地方の15大名中、上杉（米沢）とその支藩上杉（新田）を除く13大名が、幕末まで上下していた。幕末動乱期に入ると兵馬の往来が俄然頻繁になった。

注(2) 承った旨を記してさし出す文書。承諾書。請文。うけがき。

注(3) 旅篭銭。旅篭賃。宿銭。宿屋の宿泊料と食事代。

注(4) 田村顕允〔たむらあきさね〕。亘理伊達氏の家老で、もと常盤文吉、諱は並用、号謙斎、後に通称を新九郎と改め、義堂また珠山〔有珠山からとる〕。戊辰敗戦の際伊達氏は家中を維持することができなくなったので、顕允は新政府に願って北海道開拓の計画を樹て、胆振国有珠虻田2郡支配の官許を得た。以来刻苦精励名状を絶する困難と戦い、遂に未曽有ともいうべき成功を収め、開拓の模範と讃えられるに至った。主君邦成〔くにしげ〕はその功を以て華族男爵に列せられ、顕允もまた郡長に任ぜられた正六位を賜わった。現在の伊達市の基礎を築いた功労者である。大正2年11月20日歿、82歳。

注(5) 伊達邦成〔くにしげ〕。一門亘理伊達家最後の当主。通称藤五郎また安房、岩出山伊達邦直の弟、先代義鑑の嗣となった。人となり篤実堅忍、戊辰の役では宗家に協力しよく難局に当ったが、敗戦瓦解に終った。明治2年、北海道開拓の官許を得て、有能無比の臣田村顕允と共に、旧臣とその家族2,651人を率い、胆振国有珠郡に集団入植を断行した。以来数年、寒苦を忍び未墾の大地に挑み、遂に実り豊かな農地を開くことに成功、伊達村と称した。邦成は常に村民の指導育成に力を尽し、自らも家族と共に製麻養蚕植林等の事業に精励し、晩年までかわることがなかったという。明治25年功により男爵に列し従五位に叙せられた。同37年11月29日歿、64歳。大正4年11月従四位を贈られた。現伊達市の開祖というべき人物である。

資料　日本国語大辞典（小学館）

37. 「榴岡」を「つつじがおか」と読ませるのは何故か

問　「榴岡」と書いて「つつじがおか」と読ませるのは、何故ですか。

答　「つつじがおか」は、「吾妻鏡」(1)の文治5年〔1189〕8月7日の記事に、『……泰衡(2)者陣干国分原、鞭館……』とあって、もとは鞭館と呼ばれたところです。地学的に上町〔かみまち〕段丘

と称せられる段丘上にあり、全体が山つつじに覆われていたので「つつじがおか」といわれるようになったといいます。この「つつじ」に漢語の「躑躅」[3]または「山榴」を当てて「躑躅岡」または「山榴岡」[4]と表記したのです。「つつじ」に相当する漢語「躑躅」「山榴」は、わが国で最も古い頃編纂された漢和辞典「和名類聚鈔」〔わみょうるいじゅしょう。又「和名鈔」〕（源順編）[5]に載っており、人々にはなじみの深い語になっていました。このようにして「躑躅岡」「山榴岡」の両方が行われているうち、「山榴岡」の方は、漢学者や文人の発想で、中国風に2字に修せられて「榴岡」となり、比較的書き易さの点からこの表記が拡散し、特に明治以後多用されるようになり、現在に至ったものです。「榴」1字では「ざくろ」ですが、仙台の「榴岡」は以上のような経緯から、「山」の字を潜在させて「つつじがおか」に当てた漢字表記なのであります。

なお、念のため、「躑躅岡」・「山榴岡」・「榴岡」の表記が、図書資料等にそれぞれどのように現われたか、その主なるものを下記のように整理して置きます。

1. 「躑躅岡」（「躑躅ケ岡」とも）
   1) 「躑躅岡釈迦堂碑銘」（元禄8〔1695〕）
   2) 「躑躅岡釈迦堂擬宝珠銘」（元禄8）
   3) 「仙台鹿の子」（元禄8）
   4) 「釈迦堂鐘銘」[6]（元禄11〔1698〕）
   5) 「奥羽観蹟聞老誌」（佐久間洞巌。享保4〔1719〕）
   6) 「仙台萩」[7]（享保8〔1723〕）
   7) 「封内風土記」[6]（田辺希文。明和9〔1772〕）
   8) 「残月台本荒萩」[8]（安永8頃〔1779〕）
   9) 「躑躅岡照星閣碑」[6]（天明7〔1787〕）
   10) 「躑躅岡筆塚銘」（文化11〔1814〕）
   11) 「新撰陸奥風土記」（保田光則。万延元序〔1860〕）
   12) 「仙台市史」[9]（明治41）
   13) 「宮城野」（斎　洛花。大正3）
   14) 「仙台繁昌記」（富田広重。大正5）
   15) 「仙台」（小倉　博。大正13）
2. 「山榴岡」[10]
   1) 「奥羽観蹟聞老志」（佐久間洞巌。享保4〔1719〕）
   2) 「聖廟〔菅神廟〕鐘銘」[7]（明和3〔1766〕）
3. 「榴岡」（「榴ケ岡」・「榴が岡」とも）
   1) 「肯山公治家記録全書後編」巻之70

「元禄7年〔1694〕10月13日条」（享保8〔1723〕成）

2) 「奥羽観蹟聞老志」（佐久間洞巌。享保4〔1719〕）

3) 「万句誹諧奉納記」(7)（享保8〔1723〕）

4) 「封内名迹志」(11)（佐藤信要。寛保元〔1741〕）

5) 「仙台案内」（庄子輝光。明治23）

6) 「仙台市史」第1巻（昭和4）

7) 「宮城県名勝地誌」（宮城県教育会。昭和6）

8) 「わが仙台」（仙台市教育会。昭和11）

9) 「仙台」増訂版（小倉　博、小倉　巌。昭和23）

10) 「仙台市史」第1－10巻（昭和25－31）

11) 「仙台市地名（町名）簿」（仙台市。昭和41）

12) 「仙台市史続編」第1－2巻（昭和44）

注(1) p. 385の注(1)参照。

注(2) 藤原泰衡。平安末期の奥州の豪族。秀衡の子。陸奥・出羽の押領使。父の遺命によって源義経を庇護したが、頼朝の圧迫を受けてこれを殺害、却って頼朝に討伐され、文治5年〔1189〕臣下の裏切りによって謀殺された。

注(3) 「伝説」（三原良吉。「宮城県史」21の内）に、『榴ケ岡　榴だけではザクロだが、昔は山榴と書いてツツジと訓んだ。平安朝時代全山ヤマツツジにおおわれ、花の盛りには多賀国府の風流な官人が絹地に摺り込んで、みちのくのツツジ摺りと称して京にも送った。ツツジの老木が枯れると根だけは生きて、その根からアセビが生えると信じられた。その花を馬が食うと中毒するので馬酔木という名が生れた。アセビも多かったことは芭蕉の「奥の細道」の通りである。』とある。

注(4) てきちょく。羊がその葉を食うと行きつもどりつして死ぬことから、つつじのこと。

注(5) p. 118の注(1)参照。

注(6) p. 194の注(5)参照。

注(7) p. 195の注(9)参照。

注(8) p.58の注(1)参照。

注(9) p. 366の注(1)参照。

注(10) p.52の注(7)参照。

注(11) p. 403の注(4)参照。

資料　大漢和辞典（諸橋轍次）

和名類聚鈔（源順）